

E-2 児童の年齢変化に伴う子供室の機能の変化について
 ——その2. 児童の室内生活行為を通じて——
 関西大学工学部 ○高橋昭子 山本昌子

「その1」で述べた目的のもとに、「その2」では、子供室内での生活行為を中心に、子供室のとりられ方や管理の自主性について述べる。主な分析項目は、①子供室内でのふだんの生活行為、昨日の生活行為、人数・相手 ②身仕度・就寝場所、就寝人数・相手 ③子供室の清掃・整理・整備・配置が元、インテリア、等である。

調査対象の選定と方法 上記の目的のもとに、同一の平面プランで、ある程度間取りに余裕のあることを条件として、昭和48年9月から49年にかけて分譲された千里ニュータウンに近接した高層住宅（片廊下フラット型式、11階1部14階建）2棟をとりあげた。各住戸のプランはすべて同じく（対称型含む）3LDK・78.40㎡（バルコニー含）の広さである。

調査は、そこに居住する児童（小2～高2、原則として小6・中3を省く）全員と、その母親を対象に、戸別訪問・留置法で行なった。

調査期間は、昭和51年4月～5月である。

調査児童数

小2・3		小4・5		中1・2		高1・2	
男	女	男	女	男	女	男	女
19	17	20	14	17	17	17	16

結果 「子供室」としてとられるのは、各学年とも、玄関横で、一応他の部屋とは独立した北側の廊下に面した4帖の部屋がもっとも多く、その割合は、年令の増加に伴ってふえる。そして、小学生の場合は共有が多く、中・高校生では専有が多い。子供室での行為は、各学年とも、「勉強」「新聞・読書・マンガ」が多く、他に小学生では「創作的な遊び」「ゲーム・カード遊び」中・高校生では「ラジオ・レコード・ステレオ」など趣味的なものがみられる。また身仕度や就寝、子供室の管理についても、年令差や若干の男女差がある。